

## 東日本大震災の津波による 壊滅的な被害を受けて

運営幹事会元代表幹事 石井 秀博



私の住んでいる宮城県亘理町（わたりちょう）は、宮城県南部、阿武隈川の河口近くに位置した亘理平野にあります。東北地方としては比較的温暖な気候の地域で「東北の湘南」とも言われ、稲作、果樹の栽培が盛んで特にイチゴが名産です。また2年ほど前には亘理町を東西に分けるように、常磐自動車道が開通しました。

私はこの生まれ故郷「亘理」に定年を迎えた平成20年9月に戻りました。

三陸海岸と違い、ここ亘理は津波が来ない安全な町でした。住民の誰もが津波が来ることを全く予想していませんでした。でも太平洋の海岸線から我が家までは直線距離でたった2kmしかなかったことが後でわかったのですが。

3月11日午後2時46分に日本における観測史上最大のマグニチュード9.0を記録した大地震（亘理は震度6弱）とその後1,100年ぶりと言われる大津波（亘理海岸では津波の高さ約12.3m）が襲ってきました。

当日、私は偶然に自宅におり、妻も私の母も自宅でした。パソコンを見ているときに、携帯電話が鳴り出し（後日、携帯をチェックしたら緊急地震速報だった。）、その後で直ぐに大きな地震が。平成7年1月17日の阪神・淡路大震災も大阪で経験しましたが、あの時の地震とは全く違う巨大な地震でした。揺れの大きさ、そして揺れている時間の長さは「地球が壊れる」のではと思えるほどの恐怖心を抱かせました。震度6弱の地震が収まりすぐそばにあった携帯ラジオを聴くと、「大津波警報が発令されました」の言葉が耳に入りました。大津波警報？、どのような規模の津波なのか全くわからないままに、まずは避難が大事と判断し、直ぐに妻は近所に遊びに

行っている家に母を呼びに行きました、妻は母から「ここは津波が来ないから大丈夫」と言われたらしく悩みましたが、無理に連れて帰り、遊びに行っていた家の婦人と4人で車に乗り一緒に直ぐに避難しました。勿論愛犬の「さくら」も連れて。



▲愛犬さくら（メス2歳半年）

都会なら車では避難できませんが、私の家から津波が来ない安全な場所までは徒歩で20分以上かかります。そのため車で避難しました。誰も避難する人がいないので、道路は空いており渋滞は全くなく、10分ほどで阿武隈山地の中腹にある場所に着き、海岸を見下ろしていました。



▲大津波が見えた！！

そのうちに一緒に避難した女性が、「ストーブを消すのを忘れた」と言い、火事になったらどうしようかと心配の様子。カーラジオを聴いていたら津波が来るまで30分程度時間あるとのことで、また全員で車に乗り家に向かいました。自宅に戻り、女性がストーブを確認し、私も一度家に入り防寒具を取り台所を見たら食器棚からワイングラスが数個落ちて割れていただけで地震による被害は殆どありませんでした。そして車に乗って戻ろうと何気なく後ろを見た瞬間、南東方向から真っ黒い高さ2m程度の津波が向かって来るのが見えました。音もなく、もともと盛り上がった津波が100m程度近くまで来ていました。直ぐに車に飛び乗り、緊張で身体がガタガタ震え、あの津波に巻き込まれたらもう終わりと思いながら、常磐線脇の狭い道を津波がくるのを横に見ながら車で必死に走りました。車で500mほど走ると踏切を渡る場所があり、遮断機が下りていました。右側に迂回しようか、左側にある遮断機を突破しようか瞬時考えましたが、遮断機は車で押すと自動的に上がることを思い出し、遮断機を突破しました。

津波に気がつくのが後20秒ほど遅れていたなら、また踏切で右側に迂回していたら車共々津波に巻き込まれてダメだったと思います。本当に危機一髪の避難でした。このときも全く渋滞はなく、スムーズに阿武隈山地の中腹まで避難できました。地元の人々は「巨理に津波は来ない」と信じ切っていたのです。

中腹から海岸を見てみると、大きな津波（第2波？）が堤防や松林を襲い、特に堤防にぶつかった津波が高く舞い上がるのがしっかりと見えました。

午後4時過ぎ、余震、津波が何とか収まり、車で

自宅方面に戻りましたが、海岸線から4kmほどにある常磐自動車道まで津波が来ていて、そこから先は津波の海水が残っておりいけませんでした。その地点は津波が来た先端で、沼地のようになり、たくさんの瓦礫やゴミ、そして流されてきた十数台の車が田畑の申に散乱し、信じられない光景でした。



▲沼地ようになった浜吉田駅周辺



今夜は車の中で過ごすほか無いと思い、また山の方に向かいましたが、途中に小学校があり、そこが避難所になっており、車の中より避難所が良いと判断して、避難所で一晚過ごすことにしました。もう外は真っ暗で、雪がちらついており、寒い夜でした。みんな疲れ切った様子ですが、興奮と寒さのため明け方まで殆どの方が起きていました。私も朝方にちょっとだけうつらうつらしただけでした。

翌日は知り合いが多く避難していると思われる近くの小学校避難所に行きました。そこには近所の人、同級生、そして蕎麦打ち仲間達があり、みんなお互いに無事を確かめ合い喜びあい、まずはお互いに元気なことを確認しました。朝早く同級生が我が家を見に行ってくれたようですが、瓦礫の山で途中までしかいけないと話を聞きました。

午後になって水が引いたと思い、車で向かいましたが、津波の海水が残り、途中までしか車でいけません。海水が1 mほど残っている中を、そして2 mを越える大きな瓦礫の山を2つ越しながら1.5kmほど歩いて我が家にたどり着きました。

そこは信じられない風景が広がっていました。スチール製の4連棟ガレージ、物置は跡形もなく、コンクリートの基礎だけが残っており、更に物置として使っていた家の後ろに置いてあった大きな、重いJ Rのコンテナがガレージのあった近くに斜めになっていました。



▲津波で流される前のガレージ



▲津波の後。住宅も殆ど解体された

ガレージの中に入っていた農機具の耕運機、蕎麦を刈るバインダー、そして木工工具のいろんな電動工具、そして家内の軽自動車も近くには見あたりません。



▲3月12日物置に使っていたコンテナが入り口に



▲7月中旬まだ残っているコンテナ

そして我が家の前には津波で流されてきた、防潮林の松の木や住宅の柱、梁などが大きな瓦礫の山(高さ2 m、横幅30m程度)を作っていました。

瓦礫の上から我が家を覗くと、南側の窓ガラスは全て津波の水圧で破れ、家の中は海水、泥、細かい瓦礫とゴミで一杯なのがわかりました。



▲家の前に流されてきた瓦礫の山



▲瓦礫を切り、やっと通路が出来た



▲住宅の梁、柱、農具など色んなものが



▲防潮林の松の木が瓦礫となって

瓦礫の山を越え玄関のドアをこじ開けて、何とか内部に入り中を見ると、ゴミや泥が全てのものを覆っており、泥水は床上20cmほど溜まっていた。

ストーブを消すために戻ったときに倒れていなかった、冷蔵庫、冷凍庫、食器棚、テレビ、テーブルなど、そしてあの大きな重いピアノまでが横倒しになって倒れていました。津波の破壊力が如何にすごかったのか見せつけられ、津波が入ってきた痕跡は、床上1.2mの壁のクロスにくっきりと残っていました。

信じられないことですが、システムキッチンのシンクは津波で浮き上がり壊れ、浴室は浴槽が津波のために浮き上がり壊れ、浴室の壁も津波の庄力で折れ曲がっており、書斎の本棚は倒れ、そこもゴミと泥水が一杯で何が置かれていたのかもわからない状況でした。



▲玄関には床上浸水1.2mの跡がくっきりと



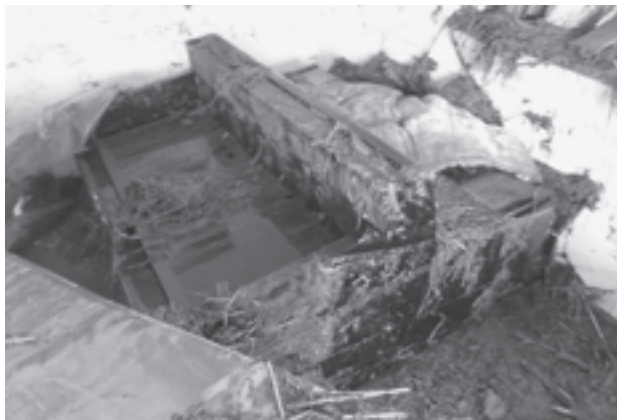
▲床上1.2mまで浸水したリビング

ロフトがあるので、階段を上ってロフトに行ったらそこだけは別世界、我が家の歴史であるアルバムはロフトにおいてあったので、全てのアルバムは大丈夫でした。全ての家電製品は勿論、エアコンの室外機もダメ。電気製品で使えるのは、照明器具だけでした。クローゼット、ドアなどの木質系も海水を含んで折れ曲がっていました。殆ど使える物はない状況でした。





▲リビングは足の踏み場もないほど家具が散乱



▲重いピアノも完全に横倒しに



▲廊下には部屋から色んなものが流れ出た



▲台所は足場も無いほど



▲和室に入った瓦礫



▲トイレのドアも流され、中には瓦礫が



▲洗濯機も横倒し、お風呂も浴槽が浮き上がってしまった



▲流れてきた瓦礫

建ててからまだ2年も経っていない我家ですが、この家には住めるのだろうか？これからどのような生活ができるのかなどの不安が頭を横切り、何から手をつけて良いのか全くわかりませんでした。

避難所に戻り、仲間達と色々な情報を交換しながら、「これからどうするのか？」を考えました。避難所は徐々に人が増えてくる、暖房器具も満足なものはありません。トイレも遠くにあり、行くのが大変。母にも大分疲れが見えているので、避難所を出ることにしました。母、私たち夫婦、そして近所の女性の4人で我が家を建ててくれた工務店の社長が経営しているアパートにお世話になることにしました。

3日目の3月13日に工務店の社長を訪ね、社長が経営している学生向けアパート1Kの部屋を借りる事にしました。

着の身着のまま避難しましたので、社長が当面の生活用品である布団、毛布など寝具一式、ストーブ、ガス台、食料、飲料水18リットル、灯抽18リットルなどを運んでくれました。アパートは、停電、断水の状況でしたが、避難所とは全く違う快適であたたかなひとときを過ごせました。（近所の女性は1週間ほどで盛岡の実家に帰りました。）

このアパートから自宅までは車で片道20kmありますが、自宅の片づけに毎日通いました。このアパートは桜で有名な白石川の近くにあり、4月中旬になると桜も満開に咲き誇り、心の慰めになりました。



▲白石川の桜並木



▲愛犬さくらと

しかし1Kのアパートは3人で生活するのには狭く、5月8日に自宅から片道10kmほどにある2DKのアパートに引っ越しました。母も一部屋に住むことができ、大分ストレス解消ができたようでした。

大工さんの頑張りもあり、我が家の修復作業は大分進み、何とか8月初めには住めるようになり4ヶ月半ぶりにやっと我が家に帰ってくることができました。しかし17軒あった我が家の町内は、殆ど家を解体して残ったのは3軒だけになってしまい、また亡くなった方は6名もあり、母の知り合いも全員が避難所や近くの町に引っ越してしまいました。私達も避難するのがあと数十秒遅れたら…と思うと、今でもゾッとします。

また新しい生活が始まるわけですが、地震・津波が来る前の生活に戻るのは大分先になりそうです。でも私たちは恵まれた方です。ご両親や子供さん、親戚を亡くされた方、家を流され住むところが無い方などから比べると、私たちは全員が無事でした。我が家は壊滅的な被害を受けましたが、何とか修復ができて住むことができました。

津波の恐ろしさを思い出しながら、思いつくままに長々と書いてしまいました。私が住んでいた亘理町には津波が来ないと思っていましたが、震災以降、いろんな事がわかってきました。約1,100年前の平安時代に今回と同じ様な大きな地震、津波（貞観津波）があったようです。そして更にその1,000年前（弥

生時代)にも同様の津波があったらしいと新聞で報道されていました。

1,000年ごとに襲ってくる巨大地震・津波、対策は？マスコミでは「防災」から「減災」への考え方が注目を浴びています。

今回は直下型地震でなかったため地震による大きな被害はありませんでしたが、津波が被害を大きくしたのです。津波被害の大きさ、破壊力のすごさは始めて知りました。津波さえなかったらとつくづく思いましたが、津波のあの破壊力の強さには、どう考えても勝てません。「逃げるが勝ち」しかありません。

地震当日、あの大きな地震、津波を経験しますと、頭の中はパニック状態になりました。まともな判断、行動ができませんでした。大津波警報が出ているのに、家に戻ったことは大きな反省点です。

日本は地震、津波は勿論、台風、大雨等による自然災害の多い国です。「対岸の火事」ではないと思います。日本に住んでいる以上、「万が一の時にどんな行動をするのか」は大事なことです。常日頃考えているだけでは行動できません。

私の今回の経験からだけですが、まず必携なのは  
・携帯ラジオ

だと思います。

停電になるとテレビは見ることはできません。携帯ラジオならいつでもどこでも災害情報を聞くことが出来ます。

そして以下のものが必要でしょう。

- ・非常持ち出しの物（お金、水、食料、懐中電灯、携帯電話、衣服など
- ・家族との連絡方法、待ち合わせ場所（伝言ダイヤル「171」が便利です。）
- ・避難場所の確認と避難方法などなど

皆さんそれぞれに異なりますが、ご家族で相談し、「非常時行動表」を紙に書いて「玄関先に貼っておく」くらいのことをしないと、万が一の時にはスムーズに行動できません。

今回は携帯電話も長い間通じませんでした。災害の時には「想定外」の事がたくさん起こるのです。

どうぞご家族で「想定外」のことを相談され、万が一の時に無事に避難できるようにしっかりと書きとめて頂きたいと思います。また忘れないように、半年に1回程度の確認と、1年に1回の家庭訓練は必要と感じます。

ボランティアの方にも助けていただきました。我が家の掃除、片づけに友人も含め延べ50人以上の方がお手伝いに来ていただきました。泥出し作業、汚れた家具などを外に出す作業、汚れた物の水洗いなどをたくさんやって頂きました。食事、寝る場所（テントなど）を自分で確保しながら5日間も頑張っている人たちがいました。涙が出るほど嬉しかったです。

最後に、今回は皆様からの心温まる激励の言葉、たくさんのお見舞の品物などを頂き、何とか立ち上がることができました。末筆ながら心から深く感謝の気持ちを申し上げ、御礼の言葉とさせていただきます。



▲周りに何もなくなった現在の我が家（左側が我が家、右側は両親が建てた家）